

# XIV. ● ポスト・モダニズムと人間

## XIV-1 理性と狂気（あるいは、人間と人間以外の者たち）

【理性的人間の形成史としての、歴史学】

自分が何者かを教えてくれる神も、王も、将軍もない。近代とは、人間自身がおのれを定義する時代。革命によって剥き出しになった《人間》。どこまで人間はおのれの《理性》に頼ることができるだろうか？

【排除すべき非理性（＝非人間）】

魔女や狂人。表象と実在のずれをもたらす非人間たちにもたらされる過酷なあつかい（ナチスの行なった「劣等民族 Sub-human」に対する迫害。劣等民族は、ネーションの同一性をゆるがせにする……）。

【カントの理性批判】

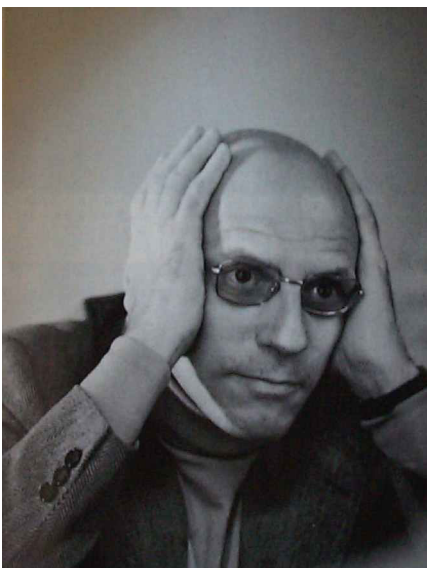
前近代的理性の批判の結果登場した新しい理性は、人間が平等であると宣言する。魔女や狂人は、空想の世界の住人に。空想をはぎ取られた残りの現実には、犯罪者や病人として、監獄や病院へとその場を移していった。理性はより健全になった！

★ 歴史とは、神から王へ、そして人間へとつづく、理性的主体の形成史だった……。

But: こうしたヒューマニズム（人間中心主義）が、「人間＝ピープル＝ネーション」の定義を外れるものを排除する傾向を生んではいないか。理性主義と人間主義のあいだの悪循環……。

→ 人間の歴史は、それ自体、善であるか否か。同じ種同士で戦争し、支配しあう理性的猿としての、人間。

## XIV-2 ミシェル・フーコー



### Michel Foucault (1926-1984)

ジャック・デリダやジル・ドゥルーズとならび、20世紀後半を代表する哲学者・歴史家。コレージュ・ド・フランスの教授。後天性免疫不全症候群にて死去。

【主著】

- 『狂気の歴史』(1961)、『臨床医学の誕生』(1963)
- 『レーモン・ルーセル』(1963)、『言葉と物』(1966)
- 『知の考古学』(1969)、『監獄の誕生』(1975)
- 『知への意志 性の歴史Ⅰ』(1976)
- 「汚名に塗れた人びとの生活」(1977)
- 『快樂の活用 性の歴史Ⅱ』(1984)
- 『自己への配慮 性の歴史Ⅲ』(1984)

○ フーコーのオリジナリティ

理性的主体の形成史ではなく、狂気の側から、歴史を見つめてみよう！

Cf. ジュール・ミシュレの歴史書『魔女』を受け継ぐ哲学的探究

古い歴史……王や貴族、武士たちのもの。

近代の歴史……人間の歴史へ。固有名をもった偉大な英雄ではなく、名もなき民衆の歴史が中心（ミシュレ）。魔女や狂人は空想的な外皮を剥がしたうえで、監獄や病院へ。そこで理性の再教育がおこなわれる。

新しい歴史……社会からはなれ、自ら孤独を選んだ者たちが、病人として、半ば強引に社会に再構成されていく。その彼らの側から、歴史を書く仕事が、われわれには残されている。

→ **歴史から消え去ろうとする者たちの歴史**を書くこと……。

### XIV-3 人間の死

#### 【狂気の歴史】

近代西欧の合理主義は、かつては知として並び立っていた狂気と学問とを裁断し、狂気を精神病にかえ、治療の対象にしてしまった。

#### 【言葉と物】

言葉（厳密には言表）は、エピステーメ（知の規準）にしたがって、《言説（ディスクール）》として再構成される。そうして歴史的に形成された知の網の目が権力となり、ひとつの視線のあり方そのものを変化させてしまう。

#### 【監獄の誕生】

近代において、それはとりわけ《規律（ディシプリン）権力》という形であらわれた。狂気＝精神病の治療同様、犯罪もまた、精神的な矯正（＝生活上の労働習慣の体得：自ら正確に8時に起き、朝食を食べ、工場に行き……）の対象である。近代における監獄は、犯罪者を別世界に隔離するための場所ではなく、《自力で更生するために精神そのものの改造を行なう場所》であった。ジェレミー・ベンサムが考案した《一望監視方式》（パノプティコン）にもとづく監獄ができるのと同じプロセスで、軍隊や学校、病院や工場が、すなわち社会が形成される。言説は、多くの場合、つねに／すでに、不可視の権力として再構成されたものだ。

#### 【知への意志】

こうした権力装置は、ついには肉体にまで及ぶ（生政治、バイオポリティクス）。近代の権力とは、前近代の王権が生殺与奪の権（簡単にいえば、殺す権利）であるとするなら、生命を保存ための権力である（国家は、国民の生命を護るためなら、戦争さえ辞さない……）。ひとつの生をはじめから終わりに至るまで管理することによって、生そのものが権力を維持するための道具として振舞い、決められた道筋を自ら演じる結果を招いてしまう（Cf. 福祉国家）。知そのものが、絶対的な真理よりも先に権力として振る舞い、真理のあり方を決めてしまう。たとえば、キリスト教会で行なわれた告白（懺悔）は、ひとつの精神（内面性）を、ある知的な基準（この場合はキリスト教、とくに牧人-司祭型権力）に沿った形で作り変えてしまう。さらに、そうした権力は、性という快楽に満ちた欲望さえ、再構成した形でひとに与えることになるだろう。

#### ○ 彼が作り上げた、非常に魅力的な概念

歴史学的なもの：考古学／言説（ディスクール）／エピステーメ／言表（エノンセ）／主体…

社会学的なもの：狂気／ディシプリン／パノプティコン（一望監視方式）／統治／牧人-司祭型権力／生政治…

#### ○ フーコーの権力概念

権力はミクロなものとして、一個人の周囲に広がる人間関係そのものにまで及んでいる。こうした権力関係の網の目のなかで、ひとはどのように《自由》を実現することができるのか？

○ 人間の死

この書物の出生地はボルヘスのあるテキストのなかにある。それを読みすすみながら催した笑い、思考におなじみなあらゆる事柄を揺さぶらずにはおかぬ、あの笑いのなかにだ。いま思考と言ったが、それは、われわれの時代と風土の刻印をおされたわれわれ自身の思考のことであって、その笑いは、秩序づけられたすべての表層と、諸存在の繁茂をわれわれのために手加減してくれるすべての見取図とをぐらつかせ、〈同一者〉と〈他者〉についての千年来の慣行をつきくずし、しばし困惑をもたらすものである。ところで、そのテキストは、「シナのある百科事典」を引用しており、そこにはこう書かれている。「動物は次のごとく分けられる。(a) 皇帝に属するもの、(b) 香の匂いを放つもの、(c) 飼いならされたもの、(d) 乳呑み豚、(e) 人魚、(f) お話に出てくるもの、(g) 放し飼いの犬、(h) この分類自体に含まれているもの、(i) 気遣いのように騒ぐもの、(j) 算えきれぬもの、(k) 駱駝の毛のごとく細の毛筆で描かれたもの、(l) その他、(m) いましがた壺をこわしたもの、(n) とおくから蠅のように見えるもの。」この分類法に驚嘆しながら、ただちに思いおこされるのは、つまり、この寓話により、まったく異なった思考のエクゾチックな魅力としてわれわれに指しめされるのは、われわれの思考の限界、《こうしたこと》を思考するにあたっての、まぎれもない不可能性にほかならない。

(『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳、P.13)

ともかく、ひとつのことがたしかなのである。それは、人間が人間の知に提起されたもっとも古い問題でも、もっとも恒常的な問題でもないということだ。…人間は、われわれの思考の考古学によってその日付けの新しさが容易に示されるような発明にすぎぬ。そしておそらくその終焉は近いのだ。

もしこうした配置が、あらわれた以上消えつつあるものだとすれば、われわれがせめてその可能性くらいは予感できるにしても、さしあたってなおその形態も約束も認識していない何らかの出来事によって、それが十八世紀の曲り角で古典主義的思考の地盤がそうなったようにくつがえされるとすれば——そのときこそ賭けてもいい、人間は波打ちぎわの砂の表情のように消滅するであろうと。

(P.409)